# 国民学校に機銃掃射

## 空を覆う米軍機の爆音

## つめ跡は消えても

第2部　集落は　飛行場は

真室川・鮭川空襲　1

ひざ丈まで伸びた草が空き地には生い茂っていた。鮭川村京塚小反地区。旧豊里村の豊里国民学校があった地には、学校の面影を感じさせるものは残っていない。しかし国民学校教員だった新庄市金沢の新庄東山焼会長で新庄商工会議所会頭、涌井弥瓶さん(80)は、空を覆った米軍機の爆音と、ピュンピュンとぶ機銃掃射の弾丸の音、そして体を縮こませ隠れた恐怖を忘れられない。

◇　◇

村の若い男性教員が皆、徴兵され、16歳だった涌井さんは前年に国民学校初等科准訓導の免許を取り、年の幾らも変わらない5、6年生を教えていた。

1945（昭和20）年8月10日、教員2年目の夏だった。夏休みの学校には宿直の涌井さんと30歳前後の同僚の女教師、用務員のおばさんがいるだけ。朝から強い日差しが木造2階建て校舎に照りつけていた。校庭では徴兵前の少年や病気で兵役を免れた若者ら約40人が行進の練習に汗まみれになっていた。

午前10時ごろ、女教師とお茶を飲んでいると、突然、飛行機の音がした。腹の底に響く聞いたことのない音だった。おもちゃのような望遠鏡を手に、屋根の上に駆け上がると、空には2～3機の米軍機が真室川方向から来るのが肉眼ではっきりと見えた。校舎のひさしに隠れていると、米軍機は村上空を旋回し、すぐに去った。

職員室に戻り女教師と「あれがアメリカだべか。真室川飛行場の飛行機とは違うべなあ。また、来っべか」と話した。田舎町が襲われるとは思えず、恐怖はなかった。

◇　◇

しかし午後2時ごろ、爆音が再び聞こえてきた。バリバリというエンジン音が今度は全く数が多い。職員室の窓に駆け寄ると、真っ青な空を米軍機の灰色の翼が覆った。校舎の屋根すれすれに飛ぶ何十機もの米軍機。行進を練習していた若者を兵隊と勘違いし襲いに来たと思った。校庭に干していた真っ白な布に無数の穴が開いた。

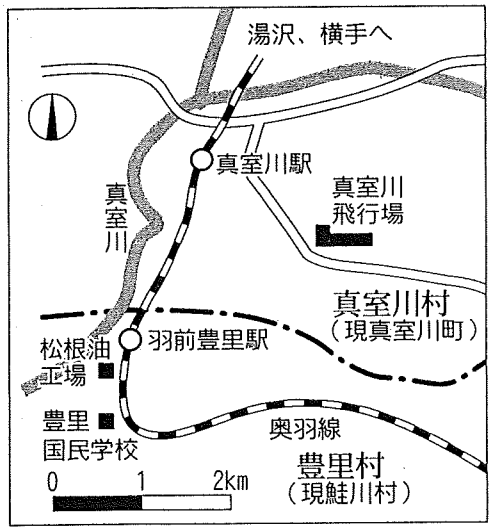
「命より大切な物だから、しっかり守れ」。そう言われ預かっていた教育勅語と天皇皇后の御真影が入った菊の紋章付きの袋で頭を隠し、女教師と玄関から飛び出し、裏の杉林まで必死に走った。杉木立の間から機体から首を傾ける米兵の姿まではっきりと見えた。

「ピンピンピンッ」。音をたて、校舎北側の窓ガラスが機銃掃射で次々と割れた。「動く物なら何だって撃たれた。逃げても逃げても米軍機に狙われている気がした」

【林奈緒美】

＝つづく

旧豊里国民学校の校舎（右）と講堂（左）。
廃校になり47年がたつ＝山田浩さん提供




**真室川・鮭川空襲**

終戦5日前の1945年8月10日、最上地方が攻撃された空襲。県警察史によると、犠牲者は、真室川町（当時真室川村）6人▽鮭川村（当時豊里村）9人▽新庄市5人（当時の萩野村4人・八向村1人）――の20人。米軍の狙いは、旧真室川村の陸軍飛行練習場・真室川飛行場とされる。

〔第3種郵便物認可〕

# 幼子に弾丸 母絶叫

## 肉塊飛散 頭と手足だけに

## つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲 2

第2部 集落は 飛行場は

山に囲まれた旧豊里村。村人が安住の地と信じていた山里には、東京や大阪から疎開に来る人も多かった。当時16歳で豊里国民学校で教えていた新庄市金沢、新庄東山焼会長、涌井弥瓶さん(80)は、大阪から疎開に来て空襲に遭った母子のことが今も脳裏に焼き付いている。

◇ ◇

米軍機の機銃掃射から逃れようと涌井さんは杉の木の根元に体を伏せていた。恐る恐る空を見上げると、木の間から何十機もの米軍機が見えた。

頭を抱え、体を丸めたまま米軍機が去るのを待っていると、杉林から50㍍ほど離れた学校の官舎から、「助けてぇ!」と叫ぶ女性の甲高い声が聞こえてきた。連呼される男の子の名前。村出身の夫に連れられ、まだよちよち歩きの幼い息子と家族3人で大阪から疎開に来ていた若い母親の声だった。

空から爆音が聞こえなくなったことを確認し、官舎に駆け付けると、開け放しにされた縁側の窓から、8畳間にバラバラにちぎれて飛び散った小さな肉塊が目に飛び込んできた。母親は、腹を撃ち抜かれ、頭と手足だけになった子供を抱きしめながら、狂ったように空に向かって泣き叫んでいた。8畳間の奥に丸まった掛け布団が見えた。

初めて聞く爆音に驚き、村人たちが逃げ惑う中で、母親は「動くとかえって危ない」と、子供と2人で布団にくるまり米軍機が去るのをじっと待っていた。しかし、布団からはいでた子供が、縁側によちよちと歩いていた一瞬の間に、窓から銃撃を受け、弾丸が男児の腹に命中したのだ。

窓からは、風一つ吹き込まず、着ていたシャツを汗が伝った。足がすくみ動くことができなかった。

◇ ◇

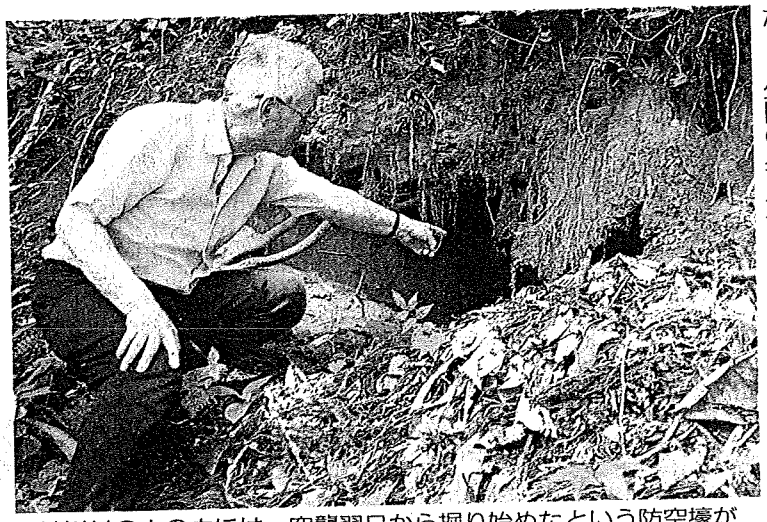
「腹が裂けてザクロのようでよ、何もしようがなかった。都会から逃げてきたのにあんなちゃっこい子が殺されるんだじぇ。飛行場があったさけえ、やられたんだ。切ねえよなあ」

蒸し暑い1日、セミの声がうるさかった。薄れていく当時の記憶。人間の記憶なんてあてにならない。でもその時受けた衝撃だけは、死ぬまで忘れられないと思う。涌井さんは63年前の夏を思い、悔しそうに目を閉じた。

小さな村が空襲に遭うなど、村人たちは考えてもいなかった。空襲翌日から掘り始めたという防空壕の穴だけが、今も村のあちこちに残っている。

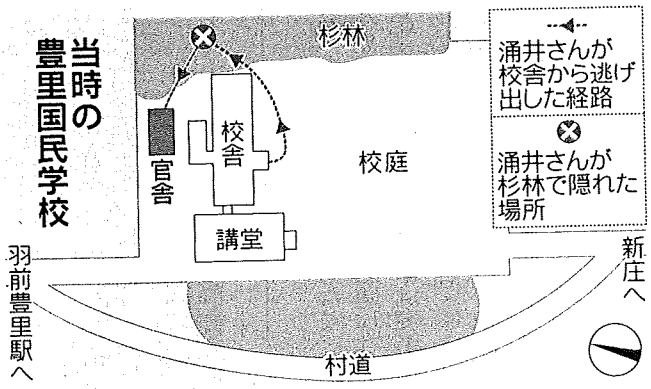
【林奈緒美】

＝つづく



鮭川村の山の中には、空襲翌日から掘り始めたという防空壕が今もあちこちに残る。住民が案内してくれた＝鮭川村石名坂で

当時の豊里国民学校



〔第3種郵便物認可〕

# 破片刺さり首から血

## あと5日遅ければ終戦だったのに

## つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第2部 集落は 飛行場は

3

鮭川村京塚で建設会社、山田組を営む山田浩さん(70)は、自宅で63年前の夏の記憶を思い出そうと、そっと目を閉じ、つぶやいた。「あと5日遅ければ終戦だったのに。小さな子どもでしたけど、何度も何度もそう思いました」

◇　◇

1945（昭和20）年8月10日午後2時ごろ、7歳だった山田さんは、羽前豊里駅から約300㍍の豊里村（現鮭川村）石名坂の自宅で、姉弟6人と、栃木県から隣家に疎開し遊びに来ていた北村トシさん母子4人で留守番をしていた。

土木会社役員だった父源次郎さん(40)は何年も前から鉄道工事で満州（現中国東北部）に行ったまま。家を守っていた母竜江さん(35)は、約150㍍離れた水車小屋に精米に出掛けていた。

飛行機のエンジン音に姉弟で窓に駆け寄ると、何十機もの米軍機が飛んで行くのが見えた。向かった方に真室川飛行場がある。「飛行場さ狙ってるんだ」。誰かがつぶやいた。

ところが数分後、編隊は引き返してきた。急降下し、石名坂集落に迫る。ドーンと遠くで爆弾が落ちた。「入って！」。長姉の敏子さん(13)が叫んだ。茶の間には、二重の畳で長方形に囲い、上に二重の畳と布団をかぶせた簡単な防空壕があった。万一のためにと竜江さんが作ったものだった。姉弟6人、慌てて潜り込んだ。

防空壕から外をのぞくと、茶の間のいろりの前に座っているトシさんが見えた。たばこの煙をゆっくりと吐き出し「大丈夫、これ一本吸ったら行くから」と、にっこり笑った。

「早く、入って！」皆でそう叫んだ直後、ワーンと耳鳴りがして爆風が家を襲った。熱風が、ほこりが、何かの破片が家の中を舞った。家の裏を流れる水路に爆弾が落ちた。土壁は粉々に崩れ、板戸は吹き飛んだ。堰(せき)からあふれた水が家の中に流れてきた。

畳の防空壕を出た途端、トシさんの首から血がびゅうびゅう吹き出しているのが見えた。首の右側に、爆弾の破片が突き刺さっていた。敏子さんが布団の綿をちぎり、震える手で傷口に当てた。しかし、白い綿はみるみる赤く染まり、取り換えても取り換えてもきりがなかった。妹たちが声を上げ泣き出した。

砂ぼこりが舞う中、泥だらけの米袋を持った竜江さんが息を切らせ戻ってきた。家の前に姉弟は並ばされた。

「いち、にぃ、さん…。みんな無事だっかぁ！」

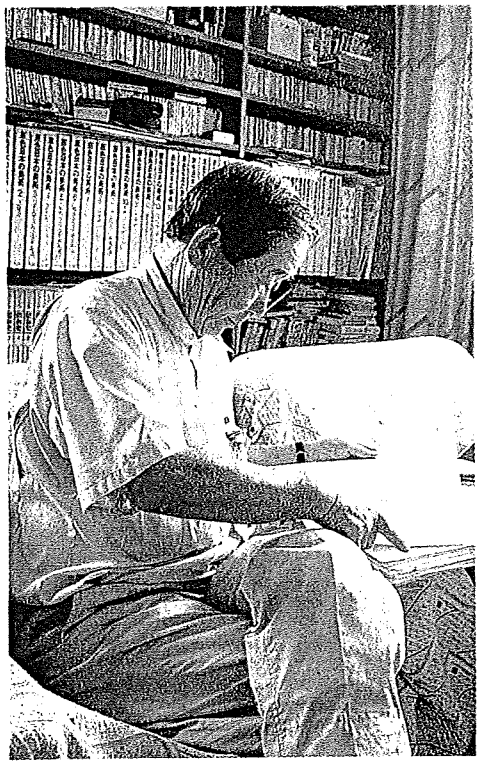
母に抱きしめられた。

◇　◇

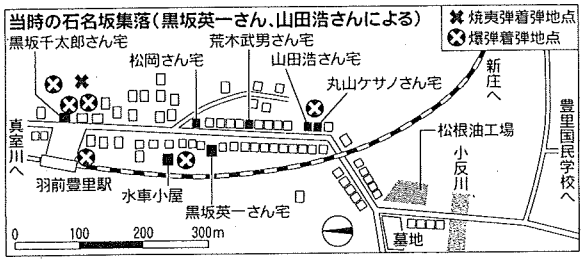
柱には、機銃掃射の跡と、爆弾の破片がいくつも刺さっていた。トシさんは近くの医院に運ばれたが、翌日、亡くなった。

【林奈緒美】

＝つづく



63年前を思い出し、「人がどんどん死んでいくおっかない時代」と語る山田浩さん＝鮭川村京塚の自宅で



〔第3種郵便物認可〕

# 村の犠牲者、9人に

## 集落の被害、詳述したノート

# つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第2部 集落は 飛行場は

4

大阪から豊里国民学校官舎に疎開していた男の子、栃木県から疎開に来ていた北村トシさん。しかし、豊里村(現鮭川村)で犠牲になったのはむろん疎開者だけではない。JR奥羽線羽前豊里駅前の石名坂集落に住む農業、黒坂英一さん(80)は、集落の被害を詳細に記したノートをめくり始めた。

◇　◇

1945(昭和20)年8月10日午前、17歳だった黒坂さんは、旧豊里国民学校校庭で行進の練習をしていた。「カンカンカン」。空襲警報の半鐘の音が響き渡り、2、3機の米軍機が迫ってきた。裏山の杉林に逃げ込み、米軍機が去るのを、息を殺して待った。

そのころ、石名坂は、米軍機の機銃掃射に遭っていた。駅から約250㍍離れた民家では布団に隠れていた荒木武男さんが、布団ごと撃ち抜かれ死亡した。黒坂さんの斜め前の松岡さん宅では、母に抱かれていた男の子が、機銃掃射の弾に当たり、腕の中で息絶えた。母も腕をもがれた。

さらに午後の再攻撃で、石名坂には爆弾6発と焼夷(しょうい)弾1発が落とされた。駅前にあった黒坂千太郎さん方の土蔵には爆弾が直撃。中にいた四男泰吉さん(9)が直撃を受け体がバラバラに吹き飛ばされた。長女イヨ子さん(16)は機銃掃射で腹を撃ち抜かれ「早く殺して」と叫び続け翌日、息を引き取った。駅から約300㍍離れた家では丸山ケサノさんも家の裏に落ちた爆弾で、亡くなった。

◇　◇

石名坂へ戻った黒坂さんは燃える集落を目の当たりにした。灰色の煙とともに、あちこちで赤い炎がめらめらと燃え上がっていた。駅前の道路は、割れたガラスの破片で足の踏み場もなく、幾つもの電柱が折れ曲がり、切れた電線がだらりとぶら下がっていた。

黒坂さんの記憶や県警察史によると、石名坂だけで6人が犠牲になった。他に京塚の下牛潜地区にあった県農事試験場最上分場は機銃掃射と焼夷弾で燃え上がり、働いていた三浦ヒロ子さんともう1人の女性が犠牲になった。国民学校官舎の男の子を加えると村の犠牲者は9人になる。

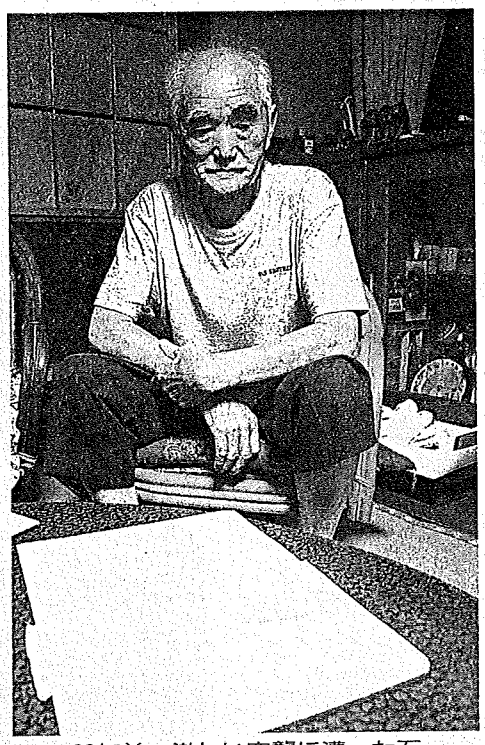
◇　◇

石名坂は、真室川飛行場に近く、また松の根から石油の代替燃料を作る海軍の松根油工場があったため狙われたと住民は考える。駅前には、油を詰める空のドラム缶約60本も野積みされていた。

「空っぽのドラム缶に、燃料が入ってるって思ったんだべな。松根油工場がなければ、石名坂はやられねがった」。黒坂さんがつぶやいた。

【林奈緒美】

＝つづく



63年前、激しい空襲に遭った石名坂集落の被害を詳細に記したノートにじっと見入る黒坂さん＝鮭川村石名坂の自宅で

◇豊里村で死亡した9人◇（黒坂英一さん、山田浩さん、黒坂専一さんによる）

| | | |
|---|---|---|
| 石名坂 | 北村トシさん | （爆弾の破片で翌日） |
| 同 | 荒木武男さん | （自宅で機銃掃射で） |
| 同 | 黒坂泰吉さん | （爆弾で吹き飛ばされ） |
| 同 | 黒坂イヨ子さん | （機銃掃射で翌日） |
| 同 | 松岡さんの男児 | （自宅で機銃掃射で） |
| 同 | 丸山ケサノさん | （裏に落ちた爆弾で） |
| 京塚 | 疎開の男児 | （国民学校で機銃掃射で） |
| 同 | 三浦ヒロ子さん | （農事試験場で死亡） |
| 同 | 女性 | （農事試験場で死亡） |

# 東条英機も視察

## 村の誇りだった飛行場建設

## つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第2部　集落は　飛行場は

5

新庄市と結ぶ県道319号沿いの真室川町内町野々村地区に、牛たちのんびりとした鳴き声が響いた。63年前、米軍の標的になったとされる陸軍真室川飛行場の兵舎は、民家約10軒と牛舎だけの小さな集落にあった。

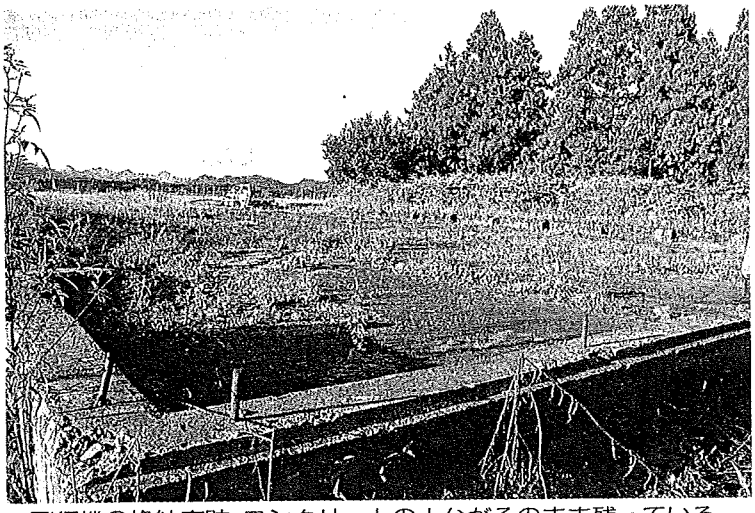
◇　◇

真室川町史によると、1936（昭和11）年、旧真室川村の佐藤平左エ門村長が、荒野の活用策に飛行場建設を提案し、村議会が承認した。もっとも、軽く地面をならした程度で、飛行機はほとんど来なかったという。

日中戦争拡大に伴い4年後、軍への転用が決まった。陸軍熊谷航空北部分隊（埼玉県熊谷市）から異動したとされる軍人が指導し、勤労奉仕の村民や、県外から集まった出稼ぎ作業員が拡張工事にあたった。飛行場は約23万坪（約76ヘクタール）から約130万坪（約430ヘクタール）に拡大され、境界の随所に有刺鉄線が張られた。

本部や兵舎、格納庫は、広大な敷地の南西の一角に集めた。湿地で地盤が緩かったため約1メートル土を掘り返し砂利石を敷き、コンクリートを流し込んだ。固まった土台の上に、本部や兵舎は建った。

滑走路は、兵舎北側に整備された。凸凹の荒野をならすため、大量の土をトロッコで運び、凹地を埋め、ローラーを転がし平らに押し固めた。雨で土が流れるのを防ぐため、仕上げに芝生を植えた。4棟の格納庫と滑走路の間には、「準備線」と呼ばれるコンクリートの土台が敷かれた。格納庫の飛行機は滑走路に向かう前、ここで燃料を注いだ。



飛行機の格納庫跡。コンクリートの土台がそのまま残っている。奥の山のふもとまで飛行場の敷地だった

◇　◇

建設中には、東条英機が飛行機で視察に訪れ、住民に金一封を送ったという。基礎工事に携わった真室川町内町、農業、井上末吉さん(84)は「東条からもらった封筒を家宝にしていた住民もいた。飛行場建設は村の誇りだったんだ」と当時を振り返る。

3年後の1943（昭和18）年、飛行場が完成。兵隊が続々とやってきた。複葉の木製機・赤トンボに加え、一回り大きい単翼の戦闘機もやってきた。銀色に光る戦闘機が滑走路を飛び立ち、旋回する様は、村民たちの目に雄々しく映った。

井上さんはその前年に、東京府村山村（現武蔵村山市）の陸軍航空学校に入学し、戦闘機操縦兵を希望した。「生の飛行機を見た連中には操縦兵はあこがれになったんだ」

真室川飛行場と、そこから飛び立つ戦闘機。軍事施設を目の当たりした村民には、強く頼もしく、負けるはずのない「帝国陸軍」の象徴だった。

【大久保渉】

＝つづく

真室川飛行場を現在と重ね合わせた地図

# 「あんな平和な里が」

## 少年兵に布団、米、どぶろく

つめ跡は消えても　第2部　集落は　飛行場は

真室川・鮭川空襲　6

真室川町内町野々村地区にあった陸軍真室川飛行場。村民は訓練に来る若き兵隊を歓迎した。宿舎に入りきらない人には寝食を提供。兵隊を招き入れ、酒や食事を振る舞うことも日常のことだった。

空襲で一家6人を失った松沢（現姓・高橋）キミエさん(83)方にも、若い兵隊2～3人が来た。夕方に兵隊が現れると、父栄太郎さん(当時39歳)が笑顔で招き、漬物やどぶろくを振る舞った。「気の良い人ばかり。夜まで騒いでな。戦争のことなんか忘れとったよ」

◇　◇

埼玉県熊谷市の元教員、鎌塚久光さん(81)も、もてなされた一人だ。

1943（昭和18）年に15歳で東京の陸軍少年飛行兵学校に入学。適性検査で通信兵に配属され、翌年12月に水戸陸軍通信学校（水戸市）から分隊長以下16人で真室川飛行場へ来た。午前6時に起き、雪の中を上半身裸で走って戦勝祈願した後、暗号解読の訓練を積む毎日だった。しかし真冬の東北の寒さと栄養失調で3カ月で肺炎を起こした。衛生兵からは「あと5日で死ぬな」と告げられた。

救ったのは、飛行場で知り合った精米所を営む農家だった。兵舎を千鳥足で抜け出し、やせ細った姿を見せると、「こりゃいかん。まず休んでいけ」と湯たんぽを出し布団に寝かされた。目覚めると、食卓には白米と漬物があった。もうろうとする頭で夢見た〝銀シャリ〟。むさぼって食べると、ようやく生きた心地がした。

回復後も、顔を出すたび快くもてなされた。豆や漬物、どぶろくも頂いた。方言がきつくあまり聞き取れなかったが、故郷の思い出話などで盛り上がった。「若けぇのに、大変だ。まず食ってけらっしゃい」。見知らぬ土地で家族のようなぬくもりに触れ、涙が出るほどうれしかった。

鎌塚さんは、5カ月の訓練後、配属が決まり、列車で真室川をたった。精米所の同い年の娘さんが真室川駅に駆けつけ、銀シャリのいっぱい詰まった重箱と恋文を手渡した。

◇　◇

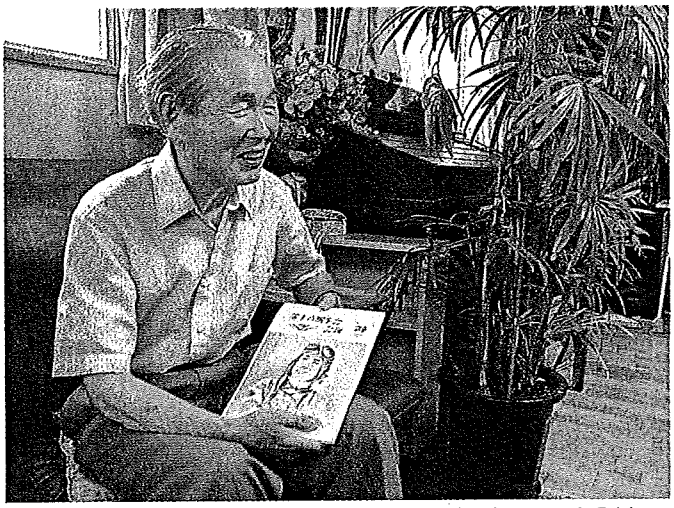
朝鮮半島で終戦を迎え、ひと月後に帰国した。真室川が空襲に遭ったことは帰国後に知った。精米所に安否を尋ねる手紙を書くと「無事」と返事が来た。

「あんな平和な里、優しい人々が暮らす村が、どこにもないよ。真室川飛行場を狙うなんて、全くバカげてる」

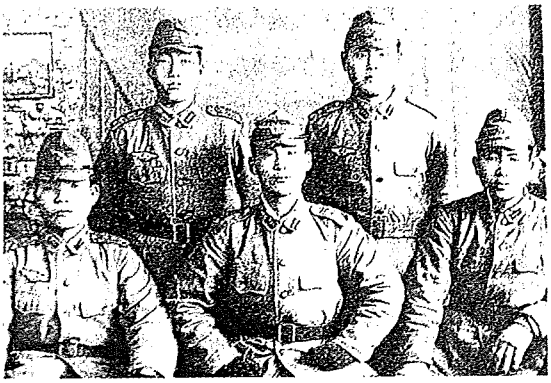
米軍は軍事施設を根絶やしにしようとしたのだろう。理屈は分かるが、感情は追いつかない。かつての少年兵は、今もそう感じている。

【大久保渉】

＝つづく



真室川飛行場で訓練した鎌塚さん。手にしているのは同期生で作る会報＝埼玉県熊谷市で



真室川飛行場で撮影された鎌塚さん（後列右）ら通信兵たち＝鎌塚さん提供

〔第3種郵便物認可〕

# つめ跡は消えても

## 第2部 集落は 飛行場は

真室川・鮭川空襲

7

# "大事な武器"翼折れ

## 惨めさ背負い担いだ赤トンボ

「疑問を感じても絶対に口には出せなかった。むなしくても、惨めでも、情けなくても、軍の命令には黙って従うしかなかった」

陸軍真室川飛行場跡地から約3キロ離れた鮭川村石名坂の黒坂英一さん(80)は、青年5人で木製飛行機・赤トンボを引きずって歩いた当時を振り返った。

◇ ◇

真室川飛行場には、赤トンボと銀翼の戦闘機合わせて約20機があったとされる。訓練後、当初は格納庫に入れていたが、敵の標的になるのを恐れ、雑木林に隠すようになった。

黒坂さんが駆り出されるようになったのは1944(昭和19)年春から。青年学校の15歳以上の仲間でほぼ10日に1度、5人1組で赤トンボを担がされた。午前6時半までに飛行場兵舎前に集合。約1キロ離れた雑木林から赤トンボを引きずり出し、滑走路まで運んだ。昼は修理する整備兵を手伝った。夕方、訓練が終わると、また5人で、30～40分かけ雑木林に機体を戻した。

赤トンボは、全長も全幅も約10メートルだった。1人が尾翼を肩に担ぎ、あとの4人は2人ずつ両翼を押し、胴体下の車輪で転がした。滑走路付近は刈り込まれた芝生でわらじでも歩きやすいが、少し離れると草むら。足首を切ったり蛇にかまれたりした。

戦地で命を張る兵隊を考えると苦ではない。むしろ楽だった。だが、肩に乗っている機体の有り様を思うと、惨めな思いが募り、涙がこみ上げてきた。「木製で軽いから、5人で楽々担げた。機体を覆う布は幾つも穴が開いていたし、着陸に失敗して翼が折れるなんて日常茶飯事だった」

「国を守るための大事な武器だ。慎重に扱え」。兵隊たちの居丈高な命令が薄ら寒く響いた。「『こんなんで勝てるわけねぇ』。分かってたけど、口に出したら非国民だ。黙って、涙をこらえて運ぶしかなかったんだ」

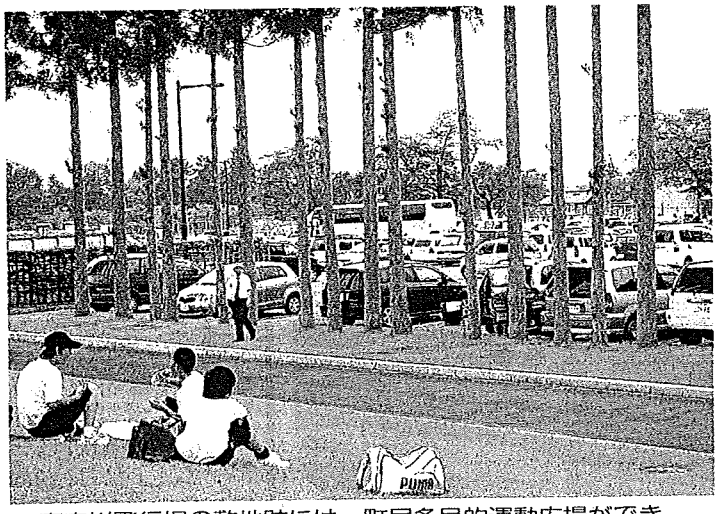
◇ ◇

終戦後、赤トンボは一カ所に集められ、兵隊がドラム缶の油を注ぎ火を放った。炎が立ち上り、あとには、黒焦げのエンジンだけが残った。

黒坂さんは、兵隊の指示でエンジンを格納庫前まで運んだ。その途中、仲間と感想を漏らした時のことを今も覚えている。「こんな飛行機で戦争も何もねぇ。勝てるわけねぇんだ」。自然と言葉が口をついて出た。近くにいた兵隊は、黒坂さんの言葉を聞こえないふりをした。

【大久保渉】

＝つづく



真室川飛行場の敷地跡には、町民多目的運動広場ができ、土手には中学生が腰を掛けて休んでいた＝真室川町新町で

真室川飛行場に並べられた赤トンボ＝「真室川町史」より

〔第3種郵便物認可〕

# 飛べずに迎えた終戦

## 無力の飛行場 名残コケむし

## つめ跡は消えても

真室川・鮭川空襲

第2部 集落は 飛行場は

8

コケと幾重もの雑草に覆われたむき出しのコンクリートが、時の経過を物語っていた。飛行機の格納庫跡2カ所。あとは軍用地と民有地を隔てる目印の「境界石」が1カ所。戦後63年たった今、陸軍真室川飛行場の痕跡は、たったそれだけしか残っていなかった。

◇　◇

1943(昭和18)年、現在の真室川町内町野々村地区に完成した真室川飛行場。雪のない5～11月には、100人もの兵隊が飛行訓練を積み、華麗な空中旋回が住民を魅了した。だが、徐々に様子が変わった。

格納庫にしまっていた赤トンボは、離れた雑木林に隠すようになった。一回り大きい戦闘機も滑走路近くの雑木林に隠した。本部からは他の基地と連絡をとる通信機器や軍事書類が運び出された。本部近くに住んでいた真室川町内町、農業、天口義雄さん(76)の自宅隣の農作業小屋には、終戦半年前からこうした通信機器が運び込まれ、兵隊が常駐するようになった。

戦況は悪くなっていた。だが、大半の村民に実感はなかった。当時小学生だった山形市吉原2、無職、梨本道夫さん(74)は「万一のことがあっても、村には飛行場がある。敵機が来ても、迎え撃ってくれると無邪気に信じていた」と振り返る。

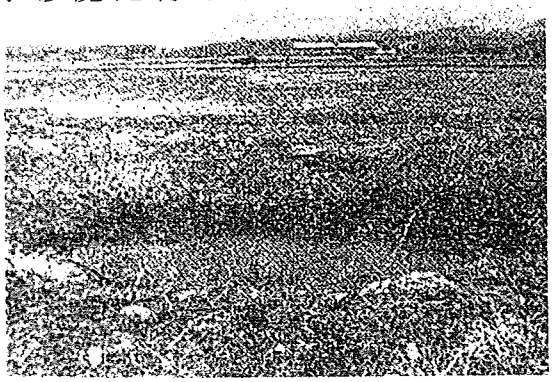
しかし45年8月10日、米軍機の来襲に飛行場は無力だった。本部や格納庫を中心に爆撃され、地面に深く穴が開いた。飛行機は無事だったが、赤トンボはもちろん戦闘機も、空を飛ぶことはなかった。

◇　◇

終戦後、赤トンボは焼かれ、戦闘機は住民が解体した。鉄板など使える部分は持ち帰った。本部や兵舎は、新しく入ってきた開拓農民の手で、住居や小屋に様変わりした。

格納庫の土台のコンクリート塊は、用水路沿いの田んぼ端にあった。田んぼを持つ寒河江トクエさん(81)は終戦後、野々村地区を開墾した一家だ。「邪魔だけど、片付けるのが大変だから動かしていないだけ」と言う。

土に埋もれた境界石。コケも張りついていた＝真室川町内町で



爆撃により真室川飛行場に開いた穴＝「真室川町史」より

同じ用水路沿いの田んぼのあぜ道には、境界石が地中に埋もれていた。野々村地区長の佐藤栄一さん(68)がスコップで掘り返すと、高さ約30センチの石柱が現れた。凸凹の石の表面に黒い土がへばりつき、彫られた文字を読み取れない。手探りの触感で文字を追った。

どうにか「陸軍」の2文字がたどれた。

【大久保渉】

＝第2部おわり